



全国工業高等学校長協会主催の講習会から (マイコン応用実習室で)

開かれた大学への第一歩 好評だったマイコン講習会

マイコン応用実習室では、先号に報じた通り、今夏、各種講習会を、諸団体の協力や主催・支援の形で開催したが、各界の関心事であるマイコンとあって、それぞれ予想を上回る参加者数で、成功裏に終わった。

中でも、全国工業高等学校長協会主催の講習会には、北は北海道から、南は九州まで、全国から予定の二倍強の参加申し込みがあった。結局、女性一名を含む八十四名が選ばれ、ベージン、アセンブラなどについて、本学の視覚

機器装備したマイコン装置をフルに駆使した、有意義な講習会となった。

参加者の同装置に対する意見はいずれも好意的で、いささか驚きも込められていた。しかし、短期間のため、参加された先生方に、装置の全機能を知ってもらうまでは行かず、次回にその期待が残された。

また、埼玉県内の高校教員を対象とした講習会では、「ベージン」言語による処理と制御を扱ったが、これまた、非常な好評を得た。マイコン教育の普及には、担当教員の教育と実習が先行する必要性は当然だが、全国工業高校の先生方の努力の程がうかがわれ、本学教員にとっても有益だった。

いよいよスタート!

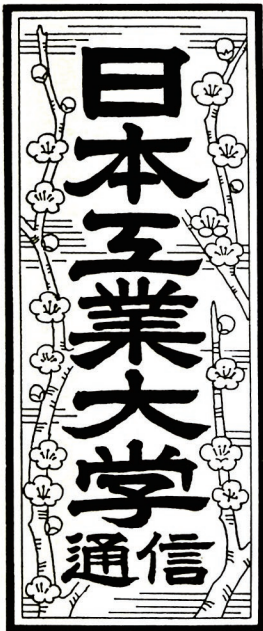
『日本工業大学 工業教育研究会』

本学を卒業して教職にある者は一二〇名を超え、その活躍の舞台も全国的な規模に及ぶに至った。本年五月初旬、一部の教員グループが集まり、お互いの研究と親睦をはかるための組織の設立が計画された。このたび、七月八日、『日本工業大学 工業教育研究会』の名称のもとに、その組織は正式に設立する運びとなった。

さらに土井正志教授よりは、「新教育課程の問題点について、それぞれ研究課題の趣旨説明がなされた。およそ二時間わたって、会員相互の熱心な研究討議が行われたのである。

材料試験センターを設置

本学では、一連のセンター構想に基づき、今度、新しく、「材料試験センター」が設置される運びとなった。既に設置された「機械工作センター」「電気実験センター」「電算機センター」「マイコン応用実習室」と同じ目的で、学生の実験・演習、研究のための設備利用や委託試験の目的で設置される。当センターは、E7実験棟に設置される予定。



発行所
日本工業大学
広報課
埼玉県南埼玉郡宮代町
郵便番号 345
電話 04803 (4) 4111

Clean & Green

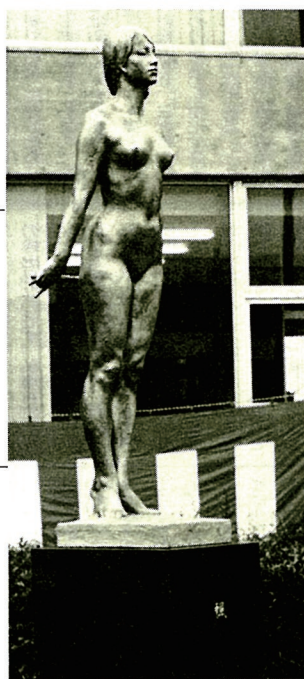
緑化計画進行中

学内の美化に協力

同窓会 彫像と仏頭を寄贈

本学同窓会では、同会の設立を記念して、彫像と仏頭を、本学へ寄贈した。去る九月二十二日、図書館の玄関前で、除幕式が行われた。式には、浅田寛二東工学園理事長、三浦勲郎学長代行、仲嶋正之総務部長、大川陽康教務部長、

竹内淳彦学生部長、渡辺正道同窓会長ら関係者多数が出席した。始めに、渡辺同窓会長からあいさつがあった後、学生代表の手で彫像の除幕が行われた。また、浅田理事長と三浦学長代行からは、「同会の設立を心から祝う」とも



仏頭 (図書館二階)

人事異動

(昭和五十四年十月一日付)
岡本保雄図書館長
新任

『日本工業大学 工業教育研究会』



大久保勝弘電気工学科主任教授

水野 担教養科主任教授

昇格

松本 繁教授(助教授)・仏語



大塚賢弘教授(助教授)・英語



'80 日本工業大学募集要項

機械工学科(200) 電気工学科(200) 建築学科(200) システム工学科(80)

一般入学		推薦入学	
出願期間	1月10日～2月14日	出願期間	11月1日～12月10日
試験日	2月15日(筆答)・16日(面接)	合格発表	12月16日
合格発表	2月20日	入学手続期限	第1回目-12月25日まで 第2回目-1月30日まで
入学手続期限	2月28日まで	選考方法	書類審査
選考方法	調査書、筆答・面接による総合審査	出願資格	本学が指定する工業高校(高校の工業課程も含む)の現役で、成績概評がB以上の者。志願学科と同系統の工業課程を履修していること。(システム工学科を志願する場合はこの限りではない。)
筆答科目	英語・数学・志願学科に関する工業科目		(注) 出願書類等は高校の進路指導室宛に送付されます。
試験場	本学		

お問い合わせは 埼玉県南埼玉郡宮代町(〒345) TEL04803-4-4111
日本工業大学 教務課入試係

キューバ・ユカタンの旅から

竹内淳彦 教授
(工業地理学)



キューバの子供たちと (グアマで)

M君 お元気ですか。安曇野ではもう秋風が立ち始めていて、三書き記し、一応の旅の報告とさせていただきます。出発の際にはわざわざ成田までお見送りありがとうございました。八月三日に出発後はカナダのトロント・モントリオール・キューバ、メキシコのユカタン半島(マヤ遺跡)、メキシコシティ、米国のヒューストン・マイアミ、ニューオーリンズとまわりシカゴから一路成田に帰って来ました。いずれ詳しい旅の話は後日のごとき重要な歩いてきました。

私達が成田からシカゴ経由でカナダに入ったのは、キューバ行きもモントリオールから飛び立つ必要があったからなのです。ところが、このモントリオールでいかに問題が発生しているのか、というのはこの都市のあるケベックは旧植民地で住民の大部分はフランス語を話しているのです。近年カナダからの独立運動が激まり、法律で英語の看板が町から姿を消し、英語の学校も存在が認められないことになってしまったのです。ですから、英語に頼る人々は隣のオンタリオ州へ逃避するなり、カナダはいま大きくゆれてます。しかも、労働力の不足はベトナム難民を入れようというので、逆にならなくなっています。逆にオンタリオ州のトロントは人口が増殖し、大変な経済発展を示しており、日本資本の本拠地も建てています。

は変りませんが、このむし暑い空港で通関にのるのろろの時間、ホテルのチェックインに時間、翌朝のマネーチェンジに時間、私達は早速キューバ半島に参ってしましました。このリスは革命後ますます狂いが激しくなっているようです。でも、カストロによる革命でキューバの経済、社会は大きく変わりました。その最大のものは農業と教育でしょう。一握りの外国の金持におさえられていた農地の大部分は解放され、農民が家をもつことか人間らしい生活ができるようになったことは大きな変化でしょう。農民の五五%は小さな小さな家に住んでいますが、他の人達は新しく建てられたアパートに住んでおり、アパートの大部分は農民コミュニティセンター内にあります。このセンターには診療所や集会所、学校などがあり、また、集会所で時々行われる巡回映画は最大の娯楽なのです。いまキューバでもっとも人気のある映画は「座頭市」シリーズと空手・柔道映画をうります。私もあちこちで「イチを知っているか」と尋ねられ最初はびっくりしましたが、学校の七割は革命後の建設で、いまではすべての国民が中学校までの教育を受けています。私の訪

れた中学では全員寄宿制で四時間学習、三時間労働の体制がとられ周辺の農場で働くこととしたが、これが全国共通のパターンのようです。勤労学生は高校や大学でも同様に私達の英語のガイドで通訳の私を苦しめた「エル君もハバナ大学で半年も道路建設に従事した」との事でした。

土地利用の形態は基本的に大きく変化せず、砂糖きびとタバコが中心作物ですが、近年オレンジ・レモン・マンゴの栽培面積がめざましく増加しています。でも、農民はこれらの作物を勝手に処分したり食たりするとはできません。これらの作物の大部分は国内にはない、機械類や石油製品を輸入する、外貨獲得のための輸出品なのです。私達もホテルでは一片のオレンジもバナナも口にすることができませんでした。また、タバコの不味(まず)さは格別で、ホテルではチップに一本のセブンスターが大変喜ばれた程です。また、計画経済下ですから主食や燃料が配給制度にあることにはもちろんです。でも、ビールはいくらでもあり、朝七時からパーティーはきわっています。

さて、キューバがいま米国と断交し、危険な関係にあることは御存知でしょう。ところが、キューバ最大の観光客はチャーター便による米国の入道です。また、大学のテキストのほとんどは米国で出版されたものが使われています。アメリカ帝国主義とアメリカ人民は別とのこと。

キューバの話が長過ぎましたのでこの辺でメキシコの話に移ることにします。メキシコの中でも私達の目的地はマヤ文化のユカタン半島です。秋吉台のような石灰岩台地、一本の川もない広大なジャングル、そのジャングルの各地に西暦以前からマヤ文化がおこり、ちよと奈良時代ごろ絶頂期を迎えていたのです。ウシュマル、カバ、チエンツァなどにはピラミッドや寺院など巨大な石造の遺跡が残っています。牛馬や車それに鉄器もは時代、しかも耕かせいせいで焼畑という生産力の低い時代に、どのようにしてこれだけの建造物をくり支えていたのでしょうか。ユカタンの大部分は、今でもジャングルに覆われていますが、(私の栽培も行われ、マヤ人は焼畑で生活を支え、主食はタロイもです。換雑作物としてヘネケン(麻)の栽培も行われていますが、人の生活は貧しく、そのため過疎化が進行しています。私は現在のユカタンの生活に謎にみつめたマヤ文化について、風土との関係を考えてみたいと思っています。

この二日間、キューバでユカタンで、あるいはその後の米国で私はいろいろな事を考え、学ぶことができました。風土、そしてその未来など。今度M君がお出掛けの折はスライドを肴に酒でも飲みながら、そんな問題に大きく関心したいと思っています。



ヘネケン(麻)工場の前で (中央筆者) メリダ・メキシコ

ネパールの印象 その②
ネパール古王宮学術調査の報告
人々がヤギを生けにえとして捧げるという。クマリの聖なる座の脇に、このヤギをつなぐ棒がある。また、スワライ・チョークはいわば後宮にあたる部分で、中庭の中央には、ロイヤル・バスと英訳された、王様のみぎの場があり、バスの前には右の玉座が置かれている。

しかし、そうした往時の光景を思い浮べるほどの余裕は、残念ながらほとんどなかった。調査作業の段取りに追われたからである。私たちは、陽差しの方向に追われながら、ネパールの陽差は、空気が澄んでいるためか、かなり強い。したがって、直接日照を受ける面では、軒下など影の部分が真っ黒に写ってしまう。調査の役に立たない。太陽位置を見ながら、撮影ポイントを確認してゆかねばならない。毎日の快晴が、うましくなっている。

十二月二十九日はネパール国王誕生日で、祭日である。この日は考古局の現地事務所も閉じているため、調査は休みである。翌日から調査は再開し、十二月三十一日バタンの準備調査を終えた。この日になって、古王宮に住む僧の仲介で、バタンのクマリに会うことができた。僧の祈禱のあと生地のいんげんを与えられた。これを食べなければいけないのだが、とても、生では食べない。しかし、そこは現地の習慣にならなければならぬ。これはたいへん貴重な体験で、街の人々も祭礼以外には会えないそうだ。

「環境工学」という名称は、化学、農学その他専門分野でも用いられ、しかも、各分野でその内容を異にするため、よくと紛らわしい感もあるが、建築環境工学は、その昔「計画理論」として、伝熱、日照、日射、採光、室内気候、建築音響などを領域とするいわば物理的色彩の濃い学問として発展してきた。しかし、建築はもともと環境の場に力点を置くべきであるという王朝から、光、音、熱、空気などを環境因子として総合的にとらえるようになり、一九六〇年頃から、この分野の理論を環境工学と改めるようになった。しかし、これは専門家の統一見解および合意に基づくものでな

研究室では ③
環境工学研究室
いから、環境工学の位置づけは勿論のこと、その領域はなぞ流動的で明確でないことはいくらでもない。私自身、私の解釈とその概念をもつが、その説明はあくとして、私は、建築に関する自然環境と人工環境のしかけ(建築設備や都市設備を含め)、建築環境工学を大きくとらえて考えている。

一般的に、建築学は、大別して構造学、計画学、環境工学の三大分野からなるといわれているが、この分類からすれば、とりわけ環境工学は、建築物の種類による、それぞれの目的に対して、衛生(健康)的見地からの安全性、快適性、能率性を追求する分野であるといえよう。どんな構造的な安全な建物でも、またどんな美しく機能的な室内であっても、そこに住む人の健康が保障されなければ、それは建築とはいえないであろう。このように環境工学は、人の健康や物品に直接的にかかわりをもつだけに、また、一般の生活水準や技術的水準の向上に伴う建築のより厳しい環境条件が要求されてくるにつれ、その環境工学の占める比重が急速に高まりつつあるのが現状である。このような重大な背景と、広い領域の中にあつて、私の研究室は、マクロには都市環境におけるエネルギーを軸とする都市設備・ミクロには建築環境における空気清浄を軸とする、この二面からの研究で、究極的には環境を究明しようとするものであり、遠大な計画である。

目下、研究室での都市設備の研究は、主に、都市における電気、ガス、熱媒等のエネルギー供給施設ならびに廃エネルギーを含む廃棄物の回収処理施設の有機的結合(エネルギーシステム・回路)を図るため、都市設備論を踏まえてその基礎調査を行っている。

また、一方の空気清浄は、空気中の汚染物質の動向(濃度変動・分布等)から、建物の室内環境の因子ならびに特性を解明し、またその手法を確立しようとするものであり、現地(各種ビル・地下鉄および地下街など)における環境調査とそれと並行しての実験室実験を行っている。

研究の具体的な活動や内容については、残り少ない紙面では項目の羅列に終り意味がないと思うので、ここでは、とくに環境に関する研究者に問われる研究姿勢についてふれてみたいと思う。

研究者は、患者を救うために研究が必要であり、研究のために患者が必要とされているのではないことは明白である。また、環境は、子々孫々人類の共有財産であり、研究者の研究のための環境の私物化は許されないことは当然である。しかし、研究室の外をみると環境権、公害問題、環境アセスメント、省エネルギー、二酸化窒素基準緩和、環境行政後退等、直接には関係ないが気にかかる諸問題がゴロゴロしているのが現状である。大気の新鮮が大前提で成立する建築環境にあつては、大気汚染も重要であり、とくに監視の目にも努力していきたいと思つている。

(橋本武一 建築学科助教授)



バタン古王宮のムル・チョーク中庭中央はクマリの台座 (渡辺勝彦建築学科助教授)

国際会議

「アーク物理と溶融池現象」 に出席して 石崎敬三教授(機械工学科)

「アーク物理」というテーマで国際会議を開催した。その頃私は溶接学会の理事で、溶接現象を物理的に説明し、これによって製品の品質を真つげることの必要を痛感し、二三の研究を進めていた。わが国の溶接界の長老である岡田先生のお勧めにより先生と二人で初めての国際会議に出席して、これが今日まで継続した研究発表の発端となった。その時、発表したのは、「溶融現象に関する界面張力理論」の外、短いものが三編で、いずれもアーク物理というテーマから外れている。この会議は、本来、溶接現象の物理的説明を目指したもので、当時その中心の課題がアークであったのである。従って、アークは溶接現象の一要素にすぎず、プラズマから固体までの種々な相が相互に影響し合う力学的な現象と見るべきで、とした私の主張も理解されただけで、一人の著者に四つの論文発表が許されたのもそのためだ。

今度、十三年ぶりに開かれたこの会議は、「アーク物理」と並んで、「溶融池現象」があげられ、そのトピックスの中には、私が先にI.I.W.(国際溶接学会)で発表した「溶融池の凝固とヒドの形成」がそのまま入っている。すぐ行くことに決心して、送った論文が直前にパスし、プログラムが送られてきたのが今年の一月であった。同時に送られてきた講演者への注意には、出席者は予め配布される予稿集をよく読んでおくことを前提とし、(1)データの補充(2)討論を誘うような論点を強調することに限定し、また、短い時間を有効に使うため、各種の視覚装置を使用するように勧めていた。私は口の方がはなはだ不手なもので、現象を示す一六ミリ映画を十

分間映写し、本文の拡充をスライド四枚で説明するだけで発表をすませたことにした。自分で作ったこの説明原稿を英語の専門家に見てもらい、さらにテープに吹き込んだものを覚え込むことにした。五月七日東京発。同日ロンドン着。すぐ会場の都心のホテルに泊り、翌日より三日間、会議があった。参加者は世界各国より百三十人余、講演者は三十七で、内訳は日本十二、米国五、英国五、ソ連四、あと五カ国が各三である。日本からは七人出席し、論文の質の高さも注目された。

会議はサブテーマ毎に四つほどの講演発表を続けて二時間行い、引き続き討論を二時間して、三十分のお茶か食事というサイクルで九時から十八時までまったりやるが、会場は閉会時まで満員で実に熱心である。講演時間の制限は日本の学会同様厳しいが、討論時間はたっぷりあり、司会者は発言をせかしたり、止めることは全くない。人気のある講演はいくらでも発言があり、中には討論というより自分のことを宣伝するためのものもあった。小園から来た人の中には、発言の実績を作りたいと一生懸命な人もいた。くだらない発言には一言言ってやめたいが、口が利かないのは本当に残念だ。

討論の中には、やはり英国の溶接学会の本拠である溶接研究所の人たちと、それに留学していた連中、早口でしゃべられると全く分からない。英国人も分かり易いのは、意識してゆっくり話す人だ。ロンドンコックニーというのはいささか難い。英国以外のE.C.の人は術語などは知らなくても、しゃべること自体は達者で、自国なまりの早口でやられるとついていけない。

しかし、公平に見て、日本人の英語が一番ひどい。私はその第一人者であったことは疑いない。これを自認したことがある。討論はその場で速記され、翌日、タイプされたものが発言者に渡され、趣旨に誤りがないように、分かつ易いように文章に手を入れて戻すことになっている。その速記を見て、いままさらながら私の発言が悪いことを思い知った。

例えは
私の発音 速記 速記の意味
Nat. Freight 貨物の運賃
Long wrong 間違った
welding working 言葉が
かゝの通りである。

そのにしても溶接の学会なのだから少しは気を利かせても良さそうに、というのは日本人の理想で、速記者は専門家ではないのだから余計な推理を働かせてはいけない。

活動として、この方々を中心とした全員の電話訪問などを行い、全国にその連絡の網の目を張りめぐらそう。これを一つの契機として、この組織がやがてそれぞれの地域でまとまり、いくなれば新しい支部の育成へ、または同窓会支部の育成へ、さらにはそれぞれの出身校とのパイプ作りへとつながっていくのではなかろうか。夢はさらに新しくふくらんでいく。

今までも私は日本工業大学らしい後援会とはどのようなものかと考えてきたが、このような会員相互の協力体制が成ったとき、これはその一大特色となり万端となると確信している。各方面の深いご理解と協力をたまわりたい。

- 去る九月二十三日、後援会の理事会が大学で開催されたが、理事各位の熱意ある討議は、かつてなかったような活況を呈した。議事の内容はともかく、後援会の活動がそれぞれの不満や反対意見の中から、よりよいものを生み出そうとする苦しみもいつてよいか、より強い結束を生み出しているように思え、喜ばしい限りであった。
- またまた後援会活動には滞りのそりも多しと思うが、今は草創期の十年を経て新しい礎を作り出すときである。後援会のより発展の緒として、昨年来実施しているグリーンキャンペンをみると、特にその感が深い。これからの課題として考えていきたいことは沢山あるが、会

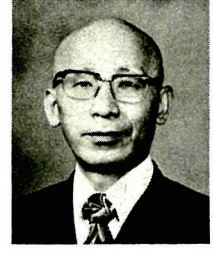
分間映写し、本文の拡充をスライド四枚で説明するだけで発表をすませたことにした。自分で作ったこの説明原稿を英語の専門家に見てもらい、さらにテープに吹き込んだものを覚え込むことにした。五月七日東京発。同日ロンドン着。すぐ会場の都心のホテルに泊り、翌日より三日間、会議があった。参加者は世界各国より百三十人余、講演者は三十七で、内訳は日本十二、米国五、英国五、ソ連四、あと五カ国が各三である。日本からは七人出席し、論文の質の高さも注目された。

会議はサブテーマ毎に四つほどの講演発表を続けて二時間行い、引き続き討論を二時間して、三十分のお茶か食事というサイクルで九時から十八時までまったりやるが、会場は閉会時まで満員で実に熱心である。講演時間の制限は日本の学会同様厳しいが、討論時間はたっぷりあり、司会者は発言をせかしたり、止めることは全くない。人気のある講演はいくらでも発言があり、中には討論というより自分のことを宣伝するためのものもあった。小園から来た人の中には、発言の実績を作りたいと一生懸命な人もいた。くだらない発言には一言言ってやめたいが、口が利かないのは本当に残念だ。

討論の中には、やはり英国の溶接学会の本拠である溶接研究所の人たちと、それに留学していた連中、早口でしゃべられると全く分からない。英国人も分かり易いのは、意識してゆっくり話す人だ。ロンドンコックニーというのはいささか難い。英国以外のE.C.の人は術語などは知らなくても、しゃべること自体は達者で、自国なまりの早口でやられるとついていけない。

しかし、公平に見て、日本人の英語が一番ひどい。私はその第一人者であったことは疑いない。これを自認したことがある。討論はその場で速記され、翌日、タイプされたものが発言者に渡され、趣旨に誤りがないように、分かつ易いように文章に手を入れて戻すことになっている。その速記を見て、いままさらながら私の発言が悪いことを思い知った。

例えは
私の発音 速記 速記の意味
Nat. Freight 貨物の運賃
Long wrong 間違った
welding working 言葉が
かゝの通りである。



石崎敬三教授(機械工学科)

日本工大らしさを求めて

後援会長 森川大成

現在、自衛隊事務局でまわっているが、とあるところの方に地方にあって緑化推進のお手伝もお願いしよう。身近な

文化団体

今年の文化団体連合会のリーダー・キャンプは、八月八日から十一日まで、長野県駒ヶ根高原で行われました。いままではほとんど、大学の指定を利用して行ってきたのですが、指定費ですと限りがあり、参加者の希望もあって、今回は、前述の場所、一般の宿泊施設を使うことにしました。

夏のリーダーキャンプでは、議題も比較的少ないため、会議中心だった春のリーダーキャンプとは趣向を変え、楽しめるものにして行こう、ということになりました。

初めての夜行列車を利用したため、朝早く駒ヶ根に着き、旅館でのチェックインまでの時間を利用して、名勝・光前寺(信濃三十三寺)で任職のお話を聞いたり、二日目の自由時間には、駒ヶ根ロープウェイを利用して、全員で中央アルプスの宝剣岳(二九一五)や木

リーダーキャンプを終えて

昭和五十四年度体育会リーダー・キャンプは、七月七日から九日まで、山形県米沢市にある「日本工業大学セミナーハウス」元元山荘で行われました。

一方、会議の内容は、主に、大学の引き継ぎのこと、リーダーキャンプを考慮しながら、各クラブ間で活発な意見交換ができたこと、今回は、前述の場所、一般の宿泊施設を使うことにしました。

夏のリーダーキャンプでは、議題も比較的少ないため、会議中心だった春のリーダーキャンプとは趣向を変え、楽しめるものにして行こう、ということになりました。

初めての夜行列車を利用したため、朝早く駒ヶ根に着き、旅館でのチェックインまでの時間を利用して、名勝・光前寺(信濃三十三寺)で任職のお話を聞いたり、二日目の自由時間には、駒ヶ根ロープウェイを利用して、全員で中央アルプスの宝剣岳(二九一五)や木

カクテルパーティ、それに毎年前午後のお茶と、参加者同志が自由に話し合う場を設けることに意を用いている。講演に対する個人的な感想や質問は、この時なされるのである。私の発表にも前記の討論での質問のほか、二、三人の人が来た。しかし、私の関心のある発表がなかった。私の方から出かけることはなかった。

会議後、日本の人々と溶接研究所を見学したが、英国の溶接研究は十七年前に比べ進み過ぎて、日本の方が進んでいるという印象をもった。一つはこれが営利研究所で、契約している相手以外には良い情報を漏らさないためもある。そのあと近くのケンブリッジのカレッジを見学した。日本で言えば、比叡山の学寮がそのまま現代に引き継がれているといったもので、不便を忍んでいるのが面白い。その一画に、一八七四年から百年続いた、キャンピング・研究所の跡を見たが、その辺りは物理化学やコンピュータの研究室が雑然と集って、東工学園や日本工大に似た趣きがあった。この後、私の大学の同級生が住

んでいるアイルランドのコックという所に飛び、その案内で周辺をドライブし、さらに百キロ程離れた東部のケリー地方を五日間自転車旅行して帰った。アイルランドは、現在、英国と離れた独立国であるが、それまではイングランド人によって徹底的に侵略され、一時は人口が五分の一に激減したと、その後、小作人として搾取されたに憤慨していることなど、その地を踏んで実感されたことだ。

ところで、この会議は来年も開かれる。今年どうせ行くなら六二年のように追加の講演を申し込んだのだが、主催者の返事に、「内容は歓迎するが、今年は講演の申し込みが多く、これを分けて来年もやることにしたので、来年やってくれ」とあった。来年も行くのはしんどいので、ほっとおいたら、送られてきたスケジュールには入っていた。そこで、改めて論文を検討し、作り直したが、やってみると案外よい報告になった。行けるうちはと思いき、楽しみにいろいろ準備しているこの頃である。

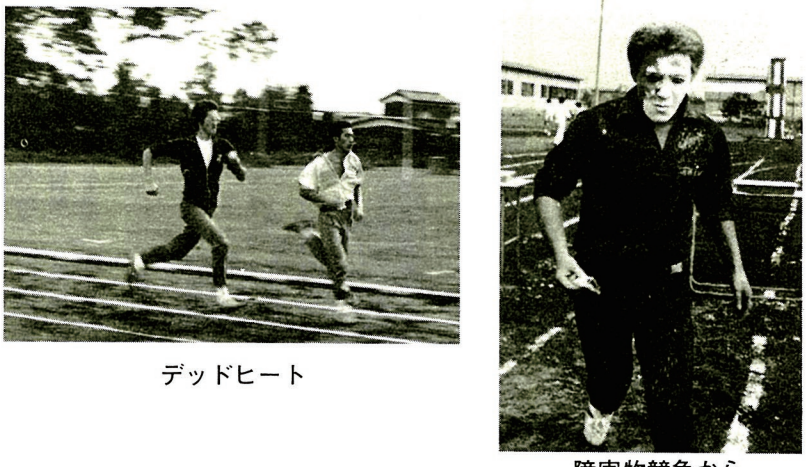
体育祭

去る十日、「体育の日」に本学体育会主催による体育祭が行われた。当日は晴天に恵まれ、心配されたグラウンド・コンディションも競技に支障がなく、午前十時開会式となった。大川陽康教授部長、市川直晴体育科教授などのあいさつがあり、学生代表の力強い「選手宣誓」があつて、各種目に熱戦の火がたが切られた。

また、当日、ソフトボール、バレーボールの大会もあり、若さはじける一日であった。

主な種目の優勝者 (チーム)

- ▽百才 松本一行(建二)
- ▽二百才 加藤五(機三)
- ▽千五百才 山崎宏(電二)
- ▽文団八百才 リー 芸能研究会
- ▽文団八百才 リー ラクビー部
- ▽マ学科対抗 ①電気②建築③機械
- ④システム



デッドヒート



体団リレーから

特別講演 第3弾

十月十七日、午後二時二十分から三二教室で、ワルシャワ工科大学のアントン・コツァインダ工学博士の特別講演が、約九十分に行われた。コツァインダ氏の勤務するワルシャワ工科大学は、十二学部から成り、学生数が二万六千人で、ポーランド一の規模を誇る大学である。同氏は、その「塑性加工」の研究を続けるかたわら、講義も担当されている。

講演は、村川正夫機械工学科講師の通訳で、同大学の概要についての説明から始まった。続いて、専門の塑性加工について、聴講生が一年生主体であることから、平易な表現で、懇切丁寧に話された。聴講した学生は、思いがけない講演の機会に恵まれ、大喜びの様子だった。

図書館から

図書館の歩みと今後の構想

十年前、図書館は一階二階を事務室、書庫、開架閲覧室として運営されていた。蔵書は一万五千冊であった。

事務室は、室の片隅を書棚で開架閲覧室と仕切られていただけの室であった。そのため、職員、学生の話し声がお互いの騒音になっていた。閲覧室のカウンターは普通の事務机であった。担当者は一方で閲覧業務をしながら、記録カードの印刷をしていた。書架は、鋼鉄製のアンケルと鉄板を溶接した自家製のものであった。そのため、本の痛みは激しかった。

しばらくの間、職員数、図書冊数は次第に増えたが、室には変わりなかった。反面、こいつら状態が学生との交流を容易にし、楽しい時期でもあった。

四十五年秋、図書館建設専門委員会が発足した。同委員会では、十年後を学生数四千人、蔵書七万冊、職員九人と想定して、新図書館を計画した。(因に、五十四年三月末現在、学生数三三三、蔵書七万二千冊、職員九人、非常勤を含む)である。

四十八年六月、新図書館は完成した。その年の七月、二万冊の図書を移動した。職員五人、技術職員五人の人員であった。この年の七月は特に暑かった。当時、四人の女子職員の奮闘は特に自覚し

かった。

四十八年九月、新しい図書館は開館した。めずらしさもあってか、利用者の数は倍増した。そのころは、大学の周囲も館の囲りも舗装は一部のみで、館内の汚れが懸念されたのでスリッパに履替えてもらうことにした。その後、周囲は次第に整備され、その三年後には現在の状態にすることができた。

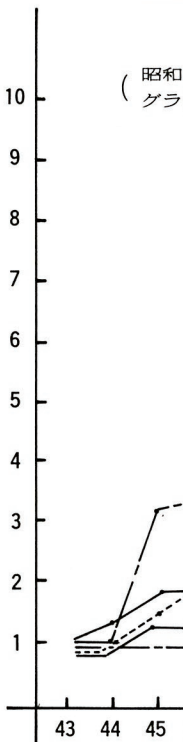
五十二年は、人の動きがはげしかった。そして、ほぼ今日の図書館の原型がこの時期にかたちづけられた。また、この時期から庭、絵など、図書館の環境づくりが始

まっていた。今度の、裸像、仏頭はその成果である。そして、五十四年、五年ぶりに館内の大巾な模様替えがあった。さて、図書館の近い将来を、できるだけはっきりと頭に描いてみた。しかし、以下のことは目標であること、あらかじめ、お断りしておく。

これから八年後(創立三十年目)蔵書は十五万冊である。各研究室の図書、雑誌の多くは図書館に集中され、利用者の便宜が図られる。同時に、本で初めての「総合図書目録」が刊行される。蔵書の内

容が整備され、特に参考図書(事典、辞典、年鑑類をい)については、全国の大学図書館の中でも屈指の存在となる。

十八年後、創立三十年目の蔵書は三十万冊である。これはおよそ学生一人あたり百冊の割合である。蔵書の内容は、特定主題のものに重点的に収集されている。これが本学図書館の大きな特色となる。そしてこれが、間違いなくやってくる機械化にもとづく相互協力(の全国ネットワーク)の中で、極めて貴重な存在となる。この時、図書館は名・実共に、大学の中心となる。



図書館長就任の弁

岡本保雄 教授

この度、思いがけず三浦先生の後任として図書館長に就任することになりました。三浦先生のように立派な館長の後、何をしてもよい難いことは覚悟しております。それに、私にとって一番柄にないポストではないかと思っております。

かつて、一介の電気技術者として実社会で仕事をし、むしろ生臭い面が多かったのではないかとありますが、それ以上に文化的な香りのする図書館というものをとまどいを感じます。

大学に来て、学生に接するの事を通じて社会に送り出すのが、一つの大きな任務になりました。変な言い方ですが、やはり一種の生産につながっているような気がします。

大学の生産部門とすると、一つの大きな違いは、納期と、うものを心配しないで済むところにある。と今更だ思っております。ところが、図書館に来て感ずるところは、その前より、図書館ではその気のある学生に権を与えようとするところ、これを食う意志のない者無理で

食わせるということをして、また、しよと思ってもできないところである、ということ。

学生を教育して社会に送り出すには、少し時間が足りないことには、前から感じていたところですが、このことを直して、納期が短くなること、通ずるようなもの、何とか納期に間に合わせるように、それなりに努力していただくこと、なります。やはり、納期を気にする会社の延長のようなものである、という気になってまいりま

した。これらを基にして考えると、図書館の仕事は優雅です。その気のある者のみに知的な権を用意すればよい。

よく泉の辺りに馬を引く唄で行くことはできるが、その泉の水を馬が飲むか飲まないかは馬の意志によると言われます。どのようにしてうまそうな水を用意するか、また、うまそうに見せるかが図書館の役目も知れぬ。そのような事は今まででしたことがないので、どうしたらよいかよく分からない。幸いにして、三浦先生が立派な軌道を敷かれているので、その上を走ればさうであるが、今度はずしたら脱線しないよう運転するかなを考へなければなら

ない。が、今まで有能な人々で運営されているので、安心してその上に乗って行けばよい、と思っております。

学校というものは図書館はつきもので、小学校以来、図書室ないし図書館があり、小学校の児童でもこの名称は承知しています。私もそうでした。しかし、図書館を外から見ると、借りて読むところ、または、そこで勉強するところという程度の認識しかない者が図書館長になったのであるから、大変であり、図書館も災難です。

六十の手習い、これから少しくこの方面の知識を吸収して立派な図書館づくりに努力して行きたいと思っております。

図書館の書庫増築なる

新しい図書館の外観

本紙前号で紹介した、第一次の模様替えに引き続き、図書館を備えた二階建てとなりました。これにより、図書館は正面から見ると、左右シンメトリカルに均等な構図を持つ外観を整えることになりました。



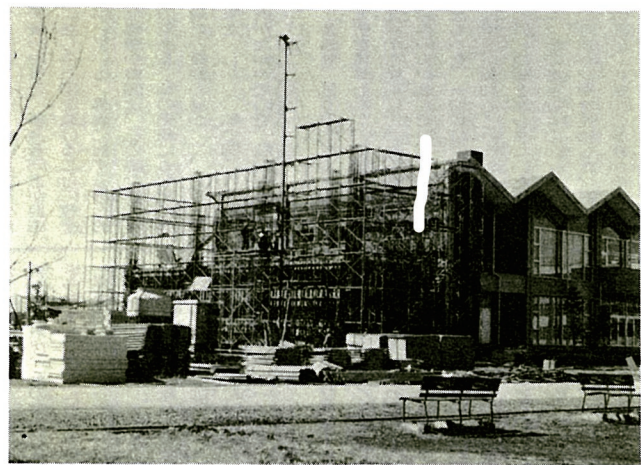
増築後の図書館

新書庫には雑誌を配架

図書館では、この新書庫を閉架式書庫として活用すべく構想し、この中に、製本雑誌をすべて配架することにしました。(写真下) 一階に洋雑誌、二階に和雑誌として、従来、旧書庫内に乱雑に置かれていた多くの未整理雑誌、寄贈雑誌等も、処分できるものは処分し、新書庫内への搬入の際に、分類番号順、および誌名順に整然と配架することを心がけました。また、キャレル・デスクを設け書庫内での学習の便に供することにしました。なお、入庫の際の手続等については、「図書館便り」最新号(第二十一号)に掲載されています。

カウンターも新しく、広く

新書庫の増築と平行して進めてきた、閲覧カウンターの新築も、このほど一応の完成をみました。一階のカウンターは、特別注文製として、設計は、図書委員の波多野純建築学講師に依頼しました。新カウンターは図書館正面を入った左側に位置し、木目を生かした美しいデザインのものとなりました。以前のものと比べ、カウンターの上部、内部共に広く、中に入って大変動きやすくなりました。カウンターの背後には、木製の書架をしつらえ、書誌・目録類を配架することにしました。これら書誌・目録類は、主要な図書館業務のひとつである、レファレンス・ワーク(「図書館便り」第十九号参照)のためには、欠くことのできない書誌のツールであり、これを、今後、図書館では重点的に収集して行く方針であることも、読み、カウンター・サービスにより一層の充実が期待できることと思っております。



工事中の図書館